

相手を明確にしたコミュニケーションを楽しみながら外国語に慣れ親しんでいく子ども

— 小学5年「プレゼント交換をしよう」活動の相手を絞り込んでいく学習過程 —

1 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

5年生になり、外国語活動がスタートした子どもたち。簡単なあいさつをくり返し行うことやゲーム、チャンツなどの活動に1学期間取り組んだが、その中で以下のような活動のふりかえりがみられた。

僕は声がけっこう小さいので、英語はちょっと苦手かなと思っていました。だけど、今日の授業で笑って言うてみたら心がはずんでとても大きい声で言うことができました。英語に対してちょっと自信がついてよかったです。

この児童は、人前でしっかり声を出して話すことに苦手意識をもっている。しかし、楽しみながら活動することで心まで弾んで活動できたことに気づき、自信をもつことにつながっている。こうして、外国語活動を通して声に出してみたり友だちと楽しくかかわり合ったりする活動を重ね、楽しみながら英語に慣れ親しんでいく姿が多くみられた。本学級の児童は、関心のある事柄に出会うと、興味を強く示す好奇心旺盛な傾向がある。よって、上記のふりかえりのように、新しい言語に対して興味をもって活動に取り組む児童が多くいた。ただ、男女でグループを作りにくかったり、一つの意見に対して意見を出して深めよう学習では発言者が限られたりする実態がある。クラス替えをしてまだまだ遠慮もあるのか、仲間同士のコミュニケーションに一步を踏み出しにくいという感が否めない。進んでコミュニケーションをとるようにするために、外国語活動におけるコミュニケーションは有効にはたらくであろう。

以上のような実態から考え、外国語活動の時間では、英語で伝え合うという相手とのコミュニケーションを楽しみながら外国語に慣れ親しんでほしい、という願いをもって取り組んでいる。外国語活動の時間にはその時間のねらいとする英語での表現に初めて出会う児童も多数いる。好奇心旺盛な実態もあることから、そのような児童は、新しいことを知ろうと高い意欲をもって取り組めるであろう。すでに英語にふれたことのある児童については興味のある事柄に対して積極的に取り組めるよさを生かし、英語にふれたばかりの児童と楽しく学習し合っていけるであろう。両者が積極的にかかわり合うような単元を展開することで、英語に対してクラスのみんながより慣れ親しんでいくことが期待できる。

(2) 本単元の目標や内容と各教科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

上記のことをふまえて、本単元では自分がプレゼントしたいものについて英語を用いて相手に対して積極的に伝えようとするコミュニケーションをとりながら、英語での表現に慣れ親しむことをねらいとした。先述のとおり5年生は外国語活動のスタートとなる学年であり、英語での表現を使って積極的に活動に取り組めるような場面を設定していくことが大切である。そこで今回は初めて出会う相手とプレゼント交換をし合う、という場面を設定した。この場面を設定することにより、あいさつの表現や簡単な会話をする必要性が生じる。また、自分が渡したいものを英語でどのように表現していけばよいかということについて自分で考えたり、友だちと考え合ったりする活動を生み出すこともできる。さらに、プレゼント交換は相手を変えて何度も行うことによってプレゼント内容を相手に合わせて考えるなど、くり返して活動を行うことができる。こうした活動を通して、英語での表現に自然と慣れ親しんでいくことができるであろう。このような基本的な表現に慣れ親しむ場をこの時期に設けることにより、今後の外国語活動においてコミュニケーションをとる際の表現の幅が広がっていくことも期待できる。ただし、慣れ親しむことがねらいであり、練習して覚えるというスキルの学習ではないことも添えておく。

(3) 11年間で育てる思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

上記のようなねらいをもち、本単元を3時間で構成した。第1次の1時間は、プレゼント交換に出会う時間である。この時にはより多くのコミュニケーションを楽しむこと、より本物に近い英語にふれ、困ったことがあっても相談しやすい体制をつくって安心できる環境で子どもたちが楽しめるためにも、

学年全体で中学校の英語教員も交えて行う。こうして子どもたちがゲームの内容を知り、楽しみながら親しんでいく場を用意することで、このゲームへの意欲が高まるような出会いの場としたい。

第2次では、ゲームをしていて疑問に感じることを出し合ったり相手を明確にしたりして、単に楽しむことからコミュニケーションを楽しみながら英語に慣れ親しむようにするためにも、クラスでの活動とする。この時に児童からはプレゼントを英語でどう言うのか、という疑問点が多く出てくるであろう。こうした子どもたちの疑問点はコミュニケーションをしている際の観察やふりかえりカードから担任と外国語担当でとらえておき、(1)で述べたような子どもたちどうしが積極的にかかわり合う場を設定できるようにする。特に、英語で何と言えよいか、という点が多く出ることが考えられる。この時には子どもたち全体に疑問を投げかけ、お互いに教え合ったり子どもたちがもっている外国語への知識とつながりような言葉がけをしたりして、可能な範囲で自分たちで考える場をもつようにしたい。また、相手については、第1時では自由な相手で楽しみ、第2時ではクラスの中というより少ない人数でもう一度楽しみ、第3時では男子は女子に、女子は男子に、と相手を教師側で設定していく。交換相手を男女にすることで、相手に渡すものをある程度限定でき、同性同士で考え合う場も設定しやすい。こうして相手を限定していく段階をふむことにより、相手の立場に立って考えようとする意欲を高めることが期待できる。また、コミュニケーションを楽しみながら英語での表現を何度も自然に行う場を生み出すこともできる。11年間の学びにおける5年生1学期は、外国語活動がスタートの段階であり、以上のような展開で、コミュニケーションの楽しさにふれながら英語により慣れ親しませることができるであろう。

以上のような子どもたちの取り組みを評価し、子どもたちの実態をとらえた単元展開にしていくためにも、コミュニケーションの観察とふりかえりの時間を大切にしたい。コミュニケーションの様子を教員3名で観察することはもちろんであるが、ふりかえりを書く活動を通して、活動における子どもの思いをとらえるとともに、子ども自身も活動をして何を感じたかを自覚する場にするためである。

2 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学級全体の学び合いの場面）
1	プレゼント交換ゲームに出会う	1	・学年全体で幅広い相手とプレゼント交換ゲームを楽しむ。
2	相手を変えながらプレゼント交換ゲームをクラスで楽しむ。	2 3	・クラスで相手を変えながらプレゼント交換ゲームをする。 ◇ゲームをより楽しむために、プレゼントの英語での言い方を考えたり、設定された相手にどんなプレゼントを渡すかを考えたりすることができる。

3 学び合いによる思考力・判断力・表現力の評価

本単元における評価については、ワークシートと観察を主な手段とした。本単元において重点的に評価するのは相手意識の高まりと外国語活動への慣れ親しみである。ワークシートで相手とどんなものを交換したのか、なぜそう考えたのかなどを書くようにすることで段階のある活動での意識の変容をとらえることができ、子ども自身も自分の考えの変容を自覚できる。また、授業のふりかえりを書くことを大切にしたい。コミュニケーションや外国語への慣れ親しみが本単元の主なねらいなので、表出した姿の背景に子どもが具体的にどんなことを感じたのかを、書かれたものからより具体的にとらえるためである。その際に、以下のA～Cの基準に基づいて子どもの様子をとらえ、教師側は記述で評価した。

次	時	学習活動	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	評価基準		
					A	B	C
2	2 3	クラスで相手を変えながらプレゼント交換ゲームをする。	相手のことを考えながらプレゼント内容を決め、進んで英語でコミュニケーションを取ろうとしている。	ワークシート ゲームに取り組む様子の観察	相手が喜ぶようなプレゼントを考え、積極的に英語を使いながらコミュニケーションを取ろうとしている。	相手へのプレゼントを考え、英語を使ってコミュニケーションを取ろうとしている。	相手に合ったプレゼント内容を見出せない。見出してもコミュニケーションを取ろうとしない。

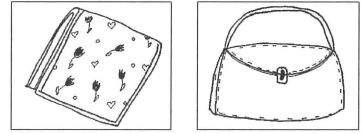
4 授業の実際

(1) プレゼント交換との出会い ～中学校の先生と～

5年生になって初めて、学年全体で外国語活動の授業を行った。また、中学校の英語教師とともに授業を行うことで、より質の高い英語表現にふれたり、初めての人とも積極的にかかわったりする機会をもてるようにした。プレゼント交換をするときに必要な表現としては、以下の通りである。

- My name is ～. (私の名前は～です。)
- Nice to meet you. (よろしくお願ひします。)
- This _____ is for you. (この _____ をあなたにあげます。)
- Here you are. (はい、どうぞ。)
- Thank you. (ありがとう。)

<教師が用意したカード>



活動は、今まで使ったことのある表現を集めることで、児童にとって分かりやすくシンプルなものになるようにした。その意図は以下の3点である。

- ① 5年生なので外国語活動が始まったばかりだが、これまでに得た語彙や表現を使ってほしい。
- ② くり返し話したり聞いたりすることで、会話することに慣れてほしい。
- ③ 上の2点を踏まえて、たくさんの友だちや教師とかわってほしい。

これらのことから考え、第1時ではプレゼントも教師が用意したカードで交換することにして、表現に慣れることに重点をおいた。初めて英語で会話をするということで、最初は不安そうな表情の子が多かったが、活動のリズムを次第につかんでいき、積極的に話そうとする子が増えていった。授業後のふりかえりには、次のような感想を書いている。

- ・初めに英語を聞いたときは、長くて覚えられないかと思ったけど、何回かやっていたら日本語と同じように話せたのでよかったです。会話をしているうちに、英語が上手な友だちもいたので、私も上手になりたいです。(児童A)
- ・話しているうちにどんどんおもしろくなって、最初はやりたくないと思っていたけど、最後までとても楽しかったのでよかったです。特に、僕が笑うと相手も笑うので、そこが楽しかったです。(児童B)

活動前と活動後で、活動や英語そのものに対する抵抗感が少なくなったことがうかがえる。これは、活動を繰り返す中で、何度も同じ表現を使いながら話したり聞いたりすることで、会話をするに慣れてきたためであると考えられる。また、会話=長い=難しいというイメージを抱いていた子どもたちも、実際に活動してみると意外と話せたり、会話はことばの組み合わせでできていることに気付いたりしている姿が見られた。さらに、友だちと交換するごとに、自分が持っていないプレゼントを持っている友だちがいることに気付く子もいた。このような姿が以下のような思いにつながっていったと考える。



- ・いつもはあまり話さない人とノリノリで会話ができました。ぼくは、英語でこんなに仲が深まったということが心に残りました。(児童C)
- ・あまりコミュニケーションをとっていない人とも、とても親しい人とも、英語を使えば、簡単にコミュニケーションがとれてよかったです。(児童D)

かわる人の幅が広がったことで、普段あまりかわらない友だちや違うクラスの友だちともかわることができ、コミュニケーションを図る楽しさを体験することができたことがうかがえる。以上のように、単元における出会いの場面においてあえて相手を広げるといった展開にしたことで、相手に伝える楽しさや、色々な人とかわる楽しさを感じ取ることができた。

(2) 学び合いで表現の幅を広げ、英語に慣れ親しんでいく

①日本語と英語との違い

表現に慣れてくると、プレゼントの品物の言い方に興味をもつ姿が多く見られるようになった。例え

ば、うちわやゆかたなど、日本のものは英語ではどう言ったらいいのか悩んでいる姿が見られた。そこで、第2時の最初に「うちわって英語でどう言うのかな」と投げかけた。以下は、そのときの授業記録の抜粋である。

T : What's this? (うちわを見せながら)
児童：うちわ
T : English, please.
児童：……うちわ？
T : Yes, it's uchiwa. What's this?
児童：ゆのみ、ゆかた、げた、たくわん、…(順に確認していく) 全部日本語になってる！
児童E：全部英語になっても日本語で言えるよ。
T : そうだね、どれも日本語でも言えそうだね。
児童F：全部、外国から来てることばじゃなくて、日本で生まれたものなんじゃないかな？
T : なるほど～、日本で生まれたから日本語で言えるのかもしれないね。他にはどんなものがある？
児童：人の名前、松江、すし、抹茶、焼き鳥…たくさんあるよ！

話し合いの内容から、日本語と英語との違いを知る姿が見られた。この時間は、第1時で使用したプレゼントに加えて、児童自身が作るオリジナルプレゼントも入れたのだが、児童自ら日本のものを見つけてプレゼントにしようとする子もいた。また、外国でそのまま使われている日本語をたくさん挙げることで、日本語の中には外国にも知れ渡っているものがあることや、それらは日本を代表する文化であることを知ることができた。この後ALTから、カナダでのうちわの使い方について伝える場を設けたところ、日本での使い方との違いに驚いている姿が見られ、我が国の文化についても理解を深めることができたと考える。

②英語ではどう言うか

また、人形や文房具類など英語での言い方を全く学習しておらず、何とか英語で表現したいが、言えずに困っている様子も見られた。以下は、その抜粋である。

児童G：This 文房具 is for you. 文房具って何て言うのかな？
児童H：(プレゼントを見ながら)ここにペンや鉛筆があるからpen やpencilでいいんじゃない？
児童G：This pen, pencil is for you. Here you are.・・・

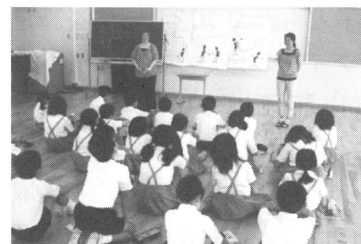
友だち同士で教え合うことで、知っていることばから予想したり、組み合わせたりしながら、何とか表現してみようとする姿が見られた。また、地球("earth")や宇宙("space")など授業で学習したことのないものもいくつかプレゼントになっていたが、言い方を知る子から、知らない子へと上のようなやりとりを通して伝わり、子どもたちの中で自然にことばの学習が行われていた。

さらに、言い方が分からない場合のみならず、ことばがなかなか出てこない場合や、言い方を間違えてしまった場合などにおいても、友だち同士で教え合う姿が多く見られた。

この時間の終末段階においては、友だちから教わったことばやALTを含む周りの教員から教わったことばがとびかっており、以上に挙げたような複数の時間における学び合いを通して表現の幅が広がったとともに、学習した表現が定着してきたことがうかがえた。

③ALTを含む複数での教員による体制

外国語活動においては、学級担任、ALT、外国語活動専科の3名体制で授業を行っている。教師も積極的に活動に参加することで、より多様な相手と交換する場を設定することができた。また、英語での言い方が分からない場合はALTをはじめ、周りの教員にも気軽に聞くことができるようにした。そのため、教員から個別に教わったことも子どもの間で伝わっていき、学び合いが活性化されたと考える。



また、ALTの本国であるカナダでの生活や習慣について話す機会を増やし、日本文化と異文化とを比べることで、様々なものの見方や考え方があることを考える場をつくることができた。

(3) 相手意識をより高めていくために

1回目の合同英語も含めて計3回プレゼント交換を行った。その3回の中で、意欲をもち相手意識を高めながらかわることができるように、話す相手を絞り、プレゼントカードも変えながら行った。

- 1回目：5年生全体でかかわる。(教師が提示したプレゼントカードで)
- 2回目：学級でかかわる。(前時のカードと自分が考えたオリジナルカードで)
- 3回目：学級で男女隔てなくかかわる。(オリジナルカードで)

3回目は、男女隔てなくかかわることができるように、4つのオリジナルプレゼントのうち、2つは男子へ、もう2つは女子へ渡すことをルールとして行った。以下は、2回目と3回目の男女のプレゼントの内容を比べたものである。

	2回目	3回目(異性へ)
男子	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム ・ピラミッド ・三葉虫 ・ハンバーガー ・地球, 宇宙 ・東京タワー ・剣 ・熊の置物 	<ul style="list-style-type: none"> ・テレビ ・島根和牛 ・宝箱 ・人形 ・ピアノ ・ゆかた ・寿司 ・ドラえもん ・ネコ ・イヌ
女子	<ul style="list-style-type: none"> ・ネコ ・イヌ ・スイカ ・Tシャツ ・ケーキ ・お菓子 ・人形 ・ピアノ ・スカイツリー 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム ・テレビ ・かき氷 ・CD ・サッカーボール ・野球道具 ・文房具 ・本 ・ホットケーキ

かかわる相手を設定することで、最初は恥ずかしがってなかなかプレゼントが浮かばなかった子も、異性である相手はどんなものがもらえる嬉しいのだろうと真剣に考える姿が見られた。プレゼントの内容を見ても、2回目と3回目とで男女とも中身が少しずつ変わっていることが分かる。



また、実際にプレゼント交換が始まったら、初めのうちは両者とも同性の友だちとかかわる姿が見られたが、手持ちのプレゼントが少なくなってくると異性の友だちにかかわろうとする姿が見られはじめた。また、練りに練ったプレゼントの中から、この人にはこのプレゼントをあげようかなと考えながら選んでいる姿もあった。以下は、そのときのふりかえりである。

- ・今日は男子のプレゼントを書いてわたしたとき「おぉ」と言ってくれてうれしかったです。(児童I：女子)
- ・今日は男子と女子にオリジナルプレゼントをあげてみたけど、女子にはお金とくまの人形をあげてみて、男子と違うような反応で「かわいい」とか「うまいね」と言われてうれしかったです。(児童B：男子)
- ・女子とも初めて話せてたくさんプレゼントがもらえました。もう少しやりたかったです。(児童K：男子)

男女とも相手の反応に注目しながら、コミュニケーションをとっていることが分かる。また、プレゼントをもらえる喜びに加えて、渡すことで相手に喜んでもらえる嬉しさも感じていることがうかがえる。こうして、プレゼントを考えたり、相手の反応を見ながら会話をしたりすることを通して、ただの楽しい活動から、相手意識を高めながらコミュニケーションをとる子どもたちの姿が見られた。最初のうちは教師がいくつかルールを決めてはたらきかけていったからこそ見えた姿であると言えよう。これらの姿をふりかえりで全体に紹介することで、相手のことを考えながらコミュニケーションをとる大切さを子どもたちが感じる場を設定できた。こうした相手を明確にした活動を設定したことが、コミュニケーションの必要性を高め積極的に英語での言い方を知らうとしたり、かかわり合ったりする動きとなった。

(4) 評価について

以上のように、相手を変えながらプレゼント交換ゲームを行ったことで、毎回新たなめあてをもったり、新鮮な気持ちで活動に取り組めたりするようにした。評価については、ふりかえりや観察をもとに行うこととしたが、ある児童の3回分のふりかえりから評価について述べる。

1回目	最初のことは分からなくて迷っていたけど、だんだんやっていくうちに分かってきて、最後はペラペラしゃべれるようになったので良かったです。友だちとも仲良くなれてうれしかったです。
2回目	私は、ピアノと子犬と地球儀をつくってみんなにわたしたら、「センキュー」とうれしそうに言ってくれてとってもうれしかったです。手作りっていいなと思いました。
3回目	いつもは女子どうしであげているけど、今日は男子にもあげるようになって、少し緊張したけど、時間がなくて、男子にはあげられませんでした。でも、喜んでもらえるようなプレゼントがかけたのでよかったです。

評価について、1回目は話すことができるようになってきたよさやたくさんの友だちとかかわれた嬉しさを感じることができた。2回目で相手意識が芽生えた。3回目は、相手とのかかわりに喜びを感じたり緊張したりと、相手意識をもってかかわろうとしていた。この児童は、その日の日記にも3回目の外国語活動のときの感想を書いており、誰にプレゼントを渡したか、そのとき相手はどんな様子であったのか細かく書いていた。つまり、英語を話せたことに加えて、相手の表情や態度にも意識が向くようになった。すなわち、3回目には評価基準Aの項目を満たす姿が認められたといえる。このように一人ひとりの取り組みを具体的に評価し、基準に照らし合わせると、第2時と第3時で以下のようになった。

第2時	A：6人(22%)	B：19人(71%)	C：2人(7%)
第3時	A：10人(37%)	B：15人(56%)	C：2人(7%)

活動の中で相手をしぼることで、より具体的に相手のことを考える機会が増えたため評価基準Aの児童が増えていった。伝えたときの相手の反応に喜びや嬉しさを感じながらコミュニケーションをとっていったことが、相手意識の高まりにつながったと考えることができる。

5 成果と課題

成果としては、上記の評価の項目で述べた、相手意識が高まってコミュニケーションを積極的にとっていったこととした児童の姿が現れた展開にある。その要因としてはまず、これまでに述べてきた相手を絞っていったことが挙げられる。また、(2)④で述べたように、子どもの疑問をとらえ、日本語と英語との違いに目が向くような全体への投げかけや、英語での言い方が分からなくても教師がすぐに答えず、子どもたち同士で考えるよう投げかけるといったはたらきかけも考えられる。こうして自分たちで日本語と英語の違いなどに気づいていけるような方向づけを行ったことで、与えられた英語表現ばかりではなく、自分たちで考えていこうとする意欲が高まった。そして、子どもにとって分かりやすくシンプルな表現を集め、会話をくり返したことも挙げられる。そうすることで「こんなことも言ってみたいけど、どのように言うのだろう。何とかして言えないかな」などと子ども自身が使いたい英語を考えることにつながっていった。しかし、これらの成果を挙げつつも基準Cの子どもがいたというのも事実であり、子どもの姿をとらえ、こうした子どもに必要な手立てを考えていかねばならないという課題が、改めて浮き彫りになった結果であるといえよう。また、以下の2点についても、課題として挙げられる。

①週1時間の授業の中で、くり返し基本表現を練習する場をどう確保するか。

45分の授業の中で練習の場を確保するためには、短い時間で効率的に練習する必要がある。どの練習にどれくらいの時間をかけるのか見極め、リズムに合わせたり簡単なゲームを取り入れたりしながら、楽しみながら自然に何度も練習できるような方法や場を考えていくことが課題である。

②これまでの習得語彙や表現が少ない中で、新しい内容に挑戦していく授業構成において、学び合いの時間をどう位置づけていくか。

外国語活動の5年生では、学び合いは1時間かけてじっくり行うのではなく複数の時間に入れて、単元全体で行われるのが望ましいことが今回の実践を通して見えてきた。これは1つの成果と言えよう。5年生は外国語活動がスタートした学年であり、この実践は中でも1学期のものである。①で挙げたように、できるだけ声に出したり、互いにコミュニケーションをとり合ったりする時間も必要である。よって、1時間ごとの有効な組み立てを考えていくことが課題であるといえる。これらの課題をふまえ、今後も学年や学級の実態に合わせて指導を進めていきたい。(文責 福島 歩惟・喜多川 昭博)